

教 育 研 究 業 績

氏名 池田善英

学位：文学修士（心理学）

研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
心理学	社会心理学 自己過程 対人認知 パーソナリティ	
主要担当授業科目	基礎演習Ⅰ 基礎演習Ⅱ 心理学入門 性格の心理 コミュニケーション論 モチベーション論 消費者の心理 経済・経営の心理学 ゼミナール入門 ゼミナールⅠ ゼミナールⅡ	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		特になし
2 作成した教科書, 教材		
①プレゼンテーション能力育成のための教育法研究（私立大学教育研究高度化推進特別補助 採択）	平成17年 平成18年 平成19年	プレゼンテーション論、プレゼンテーション演習A、日本語表現法、ビジネス表現トレーニングなど、プレゼンテーション能力育成のための教育法の開発に加え、プレゼンテーション実務士資格所得のためのカリキュラムの充実と、卒業研究時に行うプレゼンテーションの充実を目的とした教育研究を実施している。特に、卒業研究においては、メディアサイト・ライブという映像提示装置を使用し、プレゼンテーションの振り返りと記録に利用する。 （共同研究者 プレゼンテーション研究グループ：小倉真理子、松坂口宜、松井陽通、野口禎一郎、浅岡由美 宮澤俊憲 池田善英 富田真紀子）
②2019年度前期基礎演習Ⅰテキスト・課題	平成31年	基礎演習Ⅰにおいて使用するテキストおよび課題を分担執筆した。担当箇所は「読解力（本の読み方）」である。 （共同執筆者 村山純 宮澤俊憲 田中真理子 三枝康雄 布川律子 石川正敏 芳野まい 原田大 石川雅俊）
③2022年度後期基礎演習Ⅰ基礎演習Ⅱテキスト・課題	令和4年	基礎演習Ⅰおよび基礎演習Ⅱにおいて使用するテキストおよび課題を分担執筆した。担当箇所は「読解力①」「読解力②」である。 （共同執筆者 宮澤俊憲 田中真理子 三枝康雄 石川正敏 芳野まい 原田大 石川雅俊）
3 教育上の能力に関する大学等の評価		
①学生による授業アンケート	平成30年	授業の理解度園地の項目で5段階評価のうち4程度の標準的な評価を得ている。
②自己点検・自己評価	平成17年 平成18年 平成20年 平成22年	自己点検・評価報告書のうち教育環境について素案記述 自己点検・評価報告書のうち教育環境と授業に対する学生の満足度について素案記述
4 実務の経験を有する者についての特記事項		特になし
5 その他		特になし
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概要
1 資格, 免許		該当なし
2 特許等		該当なし
3 実務の経験を有する者についての特記事項		特になし

4 その他		特になし
-------	--	------

研 究 業 績 等 に 関 する 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書) 1. こころの科学	共著	平成6年5月	ソフィア (全213ページ)	(全体概要)本書は大学、短期大学、専門学校における、一般教育の心理学のための教科書である。一般教育の目的は、これから深く学問を学んでいくための「きっかけ」を与えることである。当該の分野に対する興味を喚起することも、大切な役割である。本書はこのような考えから、企画された。構成は以下の通り。Ⅰ認知の科学、Ⅱ性格の科学、Ⅲ自己過程の科学、Ⅳ対人関係の科学、Ⅴ発達の科学、Ⅵ適応の科学。 (担当部分概要)Ⅲ自己過程の科学1自己注目と自己知覚 - 自分を見つめる pp67 - 74. 自己過程における前半の段階すなわち、客体的自覚理論、自己意識特性、自己知覚理論、セルフ・スキーマ、などについて解説した。Ⅳ対人関係の科学3印象形成と原因帰属 pp116-124. 印象形成における初頭効果、新近効果、非言語的コミュニケーション、帰属理論における共変モデル、行為者 - 観察者バイアス、セルフ・ハンディキャッピング、などについて解説した。(塚本伸一・川瀬隆千・塚本尚子・山岡重行・池田善英・神田信彦・岡田努)
2. ビジネス心理検定試験公式テキスト <1>基礎心理編	共著	平成25年8月	中央経済社	(全体概要) ビジネス心理学会は「ビジネス心理マスター」という資格を認定している。その公式テキストは3巻からなる。本書はその第1巻にあたり、基礎心理について解説している。また本書はビジネス心理に関する、本格的な専門書でもある。現代のビジネスの現場に求められる人材を育てるため、ビジネスの現場を改善するために、読者が本書を活用することを期待している。 (担当部分概要) 「第4章 自己とは何か」を担当した。本章では、個性や自分らしさが、どのようなものであるのかについて、初学者に向けて説明した。前半では、性格や知能などの個人の違いについて、心理学ではどのように考えているのか、を紹介した。後半では、このような個人の違いが、遺伝や経験という過去に基づいて形成されるとともに、未来に向けて個人が形成しえることを記述した。 (齊藤 勇 (監修), 匠 英一 (監修), 日本ビジネス心理学会 (編集))
(学術論文) 1. 自己呈示に関連した被服の消費と廃棄	単著	平成19年3月	東京成徳短期大学紀要第40号, 1-6.	本研究では自己呈示に関連して被服を消費する段階と、その被服を廃棄する段階との関係を検討した。流行性の高い人は、被服費が高く、不要な被服の個数が多く、廃棄に際

				して嗜好的損傷という基準を重視していた。経済性の高い人は、被服費が低く、不要な被服の個数が少なく、廃棄に際して嗜好的損傷という基準を軽視していた。自己呈示に関連した被服の消費に積極的な人ほど、廃棄に際しても自己呈示に関連した基準を重視していた。
2. 短期大学生の就職活動	単著	平成 20 年 3 月	東京成徳短期大学紀要第 41 号, 53-60.	本研究では短期大学生における、就職活動に対する自己効力感および就業動機が、就職活動に及ぼす影響を検討した。その結果、就職活動を開始した時期が早く、内定を得た企業数が多い者は、自己分析を就職と結びつける自信が高かった。自己を深く理解すると共に企業研究を適切に行うことで、より早期から就職活動に取り組むことができ、内定を獲得することに成功していたと考えられる。
3. 就職活動におけるコミュニケーション能力	単著	平成 25 年 3 月	東京成徳大学経営論集第 2 号, 1-11.	企業は学生を採用する際、学生のコミュニケーション能力を重視している。コミュニケーションは言語的コミュニケーションと非言語的コミュニケーションに大別されるが、本研究では言語的コミュニケーションに焦点を合わせた。入学試験において選抜性の低い大学の場合、言語的コミュニケーションの能力が低い学生を含んでいる。このような学生を支援するため、教育訓練を施すことが、選抜性の低い大学の役割の一つであると考えられる。
4. 責任の帰属に及ぼす評価の枠組みの影響	単著	平成 27 年 3 月	東京成徳大学経営論集第 4 号, 9-20.	社会問題の解決を図るには、多くの人々がその問題を理解し、解決策を受容することが必要である。実験参加者を、社会条件または個人条件に、割り当てた。主人公が死に至る物語を呈示し、これを救う責任が様々な人々にどの程度あると思うかを評価させた。社会条件では個人条件より、身近な他者の責任や社会の責任は重く帰属された。評価の枠組として社会を用いることで、責任を社会に帰属させられることが明らかとなった。
5. 倫理的消費に及ぼす購入動機の効果	単著	平成 30 年 3 月	東京成徳大学経営論集第 7 号, 15-27.	本研究では倫理的消費について、購入動機に焦点を当てて検討した。全国の消費者を対象にウェブ調査を実施した。購入動機を社会的動機と個人的動機に分類して、その効果を検証した。社会的動機の高い人ほど、倫理的消費を実行していた。個人的動機については倫理的消費との関連を見出せなかった。倫理的消費を普及させるために、どのように個人的動機を促進するかが、今後の検討課題である。
6. 倫理的消費の個人的動機に及ぼす賞賛獲得欲求の効果	単著	令和 4 年 3 月	東京成徳大学経営論集第 11 号, 49-63.	本研究では倫理的消費の個人的動機に関連する個人差変数として、賞賛獲得欲求を取り上げた。調査の結果、賞賛獲得欲求の高い人ほど、倫理的消費に関する個人的動機が高く、倫理的消費に関心が高く、倫理的消費を実践していた。賞賛獲得欲求が高い人ほど、他者からの肯定的な評価を求めるといふ個人的動機が高い。倫理的消費を実践することは、他者から賞賛を受ける機会を増

				大させるためと考察した。
(その他) 1. 地球環境の悪化への対応についての社会心理学的研究	共著	平成3年	日本グループ・ダイナミックス学会第39回大会発表論文集	地球環境悪化現象の特徴は、われわれにとって心理的に遠い出来事ではあるが、漠然とした危機感を与えるものである。この危機感がどのようにしたら自己への危機として受け取られるようになるのかを検討する。この課題の基礎研究として、熱帯林減少問題を取り上げた。マスコミで喧伝されている割には熱帯林問題の知識をもつ者は少なく、漠然たる危機意識をもつ段階に留まっている者が多かった。日常的取り組みへの意欲を高めるには、知識を与え増やすだけでは効果的でないことが示唆された。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) (池田善英・押見輝男・中村陽吉)
2. 対人行動に関わる既存の個別のパーソナリティ尺度の検討(Ⅱ)	共著	平成5年	日本グループ・ダイナミックス学会第41回大会発表論文集	成員相互が対面している場面における行動の、心理的個人差を検討した。社会心理学領域では、様々な性格特性を構成概念として取り上げ、それを測定するため様々な性格尺度が開発されている。性格尺度間の関係から、心理的個人差の構造を検討する。本研究は一連の研究のうち、社会心理学領域で使用される代表的な性格尺度14種類を取り上げ、記述統計、信頼性、因子分析などを行い、尺度特徴を記述する部分である。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) (池田善英・小口孝司)
3. ゴミ問題の対処行動と自己過程	共著	平成6年	日本グループ・ダイナミックス学会第42回大会発表論文集	池田・押見・中村(1991)では7割以上の人が環境問題を切実に感じていたが、日常的な対処行動を行う人意欲がある人は半数に満たなかった。その要因の一つに自己感情としての羞恥心が挙げられる。環境問題に取り組もうとするときに羞恥心が生じれば、対処行動は抑制されるだろう。同様に環境を害する行動も、それを行うことによって羞恥心が高まるときには行動の抑制が生じるだろう。実験によって仮説は支持された。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) (池田善英・中村陽吉・押見輝男)
4. ゴミ問題への態度や対処行動と個人差要因	単著	平成7年	日本グループ・ダイナミックス学会第43回大会発表論文集	環境問題への態度や対処行動と、関連があると思われる個人差要因として、Consideration of Future Consequence(CFC)を取り上げる。CFCは現在の行動が引き起こすであろう遠い将来の結果を考慮し、その潜在的な結果に(現在の行動が)影響を受けることである。CFC傾向の高い人の方が低い人より、環境問題へ取り組む態度がより積極的であり、また日常生活の中で対処行動をより実践していると考えられた。実験によって仮説は支持された。